

○やけたるちのは
野火にやけた茅のは

こまちがあね

時すぎてかれゆくをのゝあさぢには今はおもひぞたえずもえける

○時すぎて—青葉の
時をすぎて。戀の一さ
かりをすぎて
○おもひぞ—野火と
おも火

物おもひけるころ、ものへまかりけるみちに、野火のも

えけるをみてよめる

伊 勢

冬がれの野べとわが身をおもひせばもえても春をまたまし物を

題しらず

水のあわのきえてうき身といひながら流れて猶もたのまる、哉

よみ人しらず

みなせ河ありてゆく水なくばこそつひにわが身をたえぬとおもはめ

み つ ね

吉野川よしや人こそつらからめはやくいひてしことはわすれじ

よみ人しらず

世中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞ有りける

心こそうたてにくけれそめざらばうつろふこともをしからましや

こ ま ち

色みえでうつろふ物は世中の人のこゝろの花にぞありける

よみびとしらず

我のみや世をうぐひすとなきわびん人の心の花とちりなば

そせい法し

おもふともかれなむ人をいかゞせむあかずちりぬる花とこそみめ

よみ人しらず

いまはとて君がかれなばわがやどの花をばひとりみてやしのばむ

むねゆきのあをん

戀 哥 五

一七一

○そめざらば—思ひ
そめざらばの心

○花を—みて—この
花のごとしとさとつて
あきらめる。昔は二人
みたものをの心もある
か
●あをん—宮内省
本、静嘉堂文庫の頼阿
本(小木)のまゝである

わすれ草かれもやするとつれもなき人の心に霜はおかなむ

寛平御時、御屏風に哥か、せ給ひける時、よみてかきけ

る
そせい法し

わすれ草なにをかたねとおもひしはつれなき人の心なりけり

題しらず
兼元藝元法元師元

秋の田のいねてふこともかけなくなにをうしとか人のかるらん

きのつらゆき

はつ鷹のなきこそわたれ世中の人の心の秋しうければ

よみびとしらず

あはれともうしとも物をおもふ時などか涙のいとながるらむ

身をうしとおもふにきえぬ物なればかくてもへぬる世にこそ有りけれ

題シラズ

典侍藤原なほいこの朝臣歌子

*「わすれ草かれもやする」の次に元永本は「わすれ草」がある。
二三四頁多参照せよ
○いね——往ぬをかける
○かけなくに——詞にかけないのにまあ、稻を穂木にかけることからいふ
○かる——苜と離る
○あはれともうしとも——あはれと思つてゐる上に更にうしと思つてゐる。感情が漸層的に高まるのをいふ
○いとながるらむ——いとまなくながれるのであらう。いとをいとまなくの略といふことの例は後撰に「春の池の玉もにあそぶにほ鳥の足のいとなき戀もするかな」とある。いとを感動詞にとつては調子がでない

あまのかるもにすむ、しの我からとねをこそなかも世をばうらみじ

いなななばもとの

あひ見ぬもうきもわが身のから衣思ひしらずもとくるひもかな

寛平御時きさいの宮の哥合のうた　すがの、たゞおむ鳥

○つれなきを今はこひじとおもへども心よわくもおつるなみだか

題しらず
伊勢

人しれずたえなましかばわびつ、もなき名ぞとだにいほまし物を

よみ人しらず

○それをだに思ふ事とてわがやどを見きとないひそ人のきかくに

あふことのもはらたえぬる時にこそ人の戀しきこともしりぬれ

わびはつる時さへ物のかなしきはいづこをしのぶなみだなるらむ

藤原おきかぜ

○われから——藻などについてゐる虫。わが身の故からの心をよせる
○れをこそなかも——なくことはなくがうらみはせぬ
○うきも——申が絶えてうくなる
○わが身のから衣——わが身からの意に唐衣をかける
○思ひしらずも——そのことわりを忘れて又あへるかと思つて
○つれなきを——申絶えてつれなくなつた人
○人しれず——吾々の戀が世間にはしれずにそれで絶えたのならば
○それをだに思ふ事とて——それ位のこととてさへはやもう、私の願ひとしてたのむからして下さるなと下の句の内容を指示する。實朝の歌に「それをだに願ふ事とてち早ぶる神の社にれがぬ日はなし」
○きかく——きくの延

○かげならずして
かげならずしては

怨みてもなきてもいはむかたぞなき鏡にみゆるかげならずして

読人しらす

○わが身こそ浪——末
の松山をこそ浪からい
ふ
○立ちかへり——浪の
縁にて哭々もしみみ
の心を含める
○うらみつる——浦を
見るに怨みをかける
○かへしても——終に
は心がはりしても
○はまのまさご——よ
むともつきじに思ひよ
せられた数は。これは
数々忘れよとの意であ
るわい

○たのみ——田の實を
かける

あしべより雲井をさしてゆく鴈のいやとほざかるわが身かなしも
しぐれつゝもみづるよりもことは心の秋にあふぞわびしき
秋風のふきとふきぬるむさしのはなべてくさばの色かはりけり
秋風にあふたのみこそかなしけれわが身むなしくなりぬとおもへば

小町

平貞文

あき風のふきうらがへすくずのはのうらみても猶うらめしきかな

よみ人しらす

○よそにぞきし——
秋などといふことはよ
そとにきいてゐたが
○身をうちばし——身
を憂きの心をかける
○なかつたえて——橋の
縁話

秋といへばよそにぞきしあだ人の我をふるせる名にこそ有りけれ
わすらるゝ身をうちばしはのなかつたえて人もかよはぬとしぞへにける
又はこなたかなたに人もかよはず

坂上これのり

あふことをながらのはしのながらへてこひわたるまにとしぞへにける

ともものり

うきながらけぬるあわともなりなむながれてとだにたのまれぬ身は

よみ人しらす

○ながらへて——流れ
てと長らへて
○いもせの山——紀伊
國那賀郡。夫婦の意を
寄せる
○なかにおつる——な
かに川があつて夫婦の
中を隔てる
○よしや——まよ。
吉野、よし、世と「よ」
の字をつゞけて用ふ

○ながれてはいもせの山のなかにおつる吉野の河のよしや世中

古今和歌集卷第十六

哀傷哥

いもうとの身まかりにける時よみける

小野のたかむらの朝臣

○なく涙雨とふら南わたり河水まさりなばかへりくるがに

さきのおほきおほいまうちぎみを、しらかは忠仁公あたりにお

くりける夜よめる延喜之北太政大臣只二人也仍
難不詳其官上世也前後之由也 そせい法し

○ちの涙おちてぞたぎつ白河は君が世までのなにこそ有りけれ

ほりかはのおほきおほいまうちぎみ、身まかりにける時

に、ふかくさの山にをさめてけるのちによみけるナシ

○わたり川——三途川
○くるがに——来る爲
に。歌賀に「路まがふ
がに」
○忠仁公——良房
○おくる——葬送
○君が世までの——白
河も今は赤くなつたか
ら白河といふ名は君が
世までのものである
○瀬河のおほきおほい
まうちぎみ——太政大
臣基経

僧都勝延

○空蟬はからを見つ、もなぐさめつ深草の山煙たにたての

○深草の野やまべのさくらはらし心こゝろあらばことし許ゆるはすみぞめにさけ

ふぢはらのとしゆきの朝臣の、身まかりにける時によみ

て、かの家につかはしけるきのともりの

ねてもみゆねでもみえけりおほかたは空蟬の世ぞ夢には有りける

あひしれりける人の、身まかりにければよめるきのつらゆき

夢とこそいふべかりけれ世中にうつ、ある物と思ひけるかな

あひしれりける人の、身まかりにける時によめるみぶのたゞみね

みぶのたゞみね

哀傷哥

一七七

○ねてもみゆ——れれ
ば勿論見える
○ねてもみえけり——
れなくてもみえる。し
てみると、このまゝが
夢か。見えるものは生
死を包む夢幻境である
○うつ、ある物と思ひ
けるかな——あさはか
にもうつ、があるもの
と思つてゐることかな
あ

ぬるがうちにみるをのみやは夢といはむはかなき世をもうつ、とはみ
ず

あねの身まかりにける時によめる

せをせけばふちとなりてもよどみけりわかれをとむるしがらみぞなき

ふぢはらのたゞふさが、むかしあひしりて侍りける人の

身まかりにける時に、とぶらひにつかはすとてよめる

閑院

さきだ、ぬくいのやちたびかなしきはながる、水のかへりこぬなり

きのともりのりが身まかりにける時によめる

つらゆき

あすしらぬわが身とおもへどくれぬまのけふは人こそかなしかりけれ

たゞみね

●身まかりにける時に
——静嘉堂文庫の頼阿
本(小本)及び兼真本は
「に」がない
○くれぬまの云々——
現に今感じてゐるとこ
ろを強くいつてゐる
○人こそ——人の死が

○時しもあれや——時
もあらうに、時も時と
て
○あるをみる——生き
てゐるのをみる
○おもひ——喪
○たもととなりけり——
時雨にぬれるもみぢは
あび人の袖のやうだ。
時雨の方からいへば涙
○ふぢ衣——喪服。既
に註した(七七頁)
○はつる——ほつれ
る。この歌はあまりに
形象化がすぎて悲みの
情がてゐない
○あさつゆの——置く
暁あけ霜しも
○かりそめに——かり
そめのものと菊をかけ
る
○雲なれや——涙の源
との心

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるをみるだに戀しき物を

は、がおもひにてよめる

凡河内みつね

神な月時雨にぬる、もみぢば、たゞわび人のたもととなりけり

ち、がおもひにてよめる

たゞみね

ふぢ衣はつる、いとわび人の涙の玉のをとぞなりける

おもひに侍りけるとしの秋、山てらへまかりけるみちに

てよめる

つらゆき

あさつゆのおくての山田かりそめにうき世のなかを思ひぬるかな

おもひに侍りける人をとぶらひにまかりてよめる

たゞみね

すみぞめの君がたもとは雲なれやたえず涙の雨とのみふる

女のおやおもひにて、山でらに侍りけるを、ある人の

とぶらひつかはせりければ、返事によめる

よみ人しらず

あしびきの山べに今はすみぞめの衣の袖のひる時もなし

諒闇のとし、池のほとりの花をみてよめる

たかむらの朝臣

水のおもにうかよしづく花の色さやかにも君がみかげのおもほゆるかな

深草のみかどの御國忌の日よめる 文屋のやすひで

草ふかき霞の谷にかげかくして日くれしけふにやはあらぬ

深草のみかどの御時に、藏人頭にてよるひるなれつかう

まつりけるを、諒闇になりにつければ、さらに世にもまじ

らずして、ひえの山にのぼりてかしらおろしてけり、そ

の又のとしみ人、御ぶくぬぎてあるはかうぶりたまは

りなど、よろこびけるをきゝてよめる 僧 正 遍 昭

○みな人は花の衣になりぬなり苔のたもとよかわきたにせよ

河原のおほいまうちぎみの、身まかりての秋、かの家の

ほとりをまかりけるに、もみぢの色まだふかくもならざ

りけるをみて、かの家によりていたりける

近院の右のおほいまうちぎみ

うちつけにさびしくもあるかもみぢばもぬしなきやどは色なかりけり

ふぢはらのたかつねの朝臣の、身まかりての又のとしの

なつ、ほとゝぎすのなきけるをきゝてよめる

つ ら ゆ き

ほとゝぎすけさなくころにおどろけば君にわかれし時にぞ有りける

さくらをうゑてありけるに、やうやく花さきぬべき時に

哀傷哥

○すみぞめ——住むと
嚴染

○しづく——水にうつ
影が水中に水は物と
く見ると距離がある故
水面に距離がある故
あるが如く見え、これ
の屈折によつて水中に
あるが如く見え、これ
も「しづく石」といふ
の御おみかげの生
りとおみかげの生
花といふことは、但し
し御顔をいふ天子の美
の御忌日——天皇崩御

○御ぶくぬぎ——諒闇
の間を脱ぐ
の間の喪服を脱ぐ
位階を賜はるはり

○花の衣——喪服に對
して、平常の花やかな
衣

○苔のたもと——隠者
の服

○河原のおほいまうち
ぎみ——河原左大臣源
融。嵯峨天皇の皇子

○うちつけに——急に
感情のたかまるのをい
ふ

○おどろけば——外界
の刺激に對して異常に
感動するのをいふ

かのうゑける人、身まかりにければ、その花をみてよめる
きのもちゆき源行

花よりも人こそあだになりにつれいづれをさきにこひんとかみし
あるじ身まかりにける人の家の、梅の花をみてよめる

つらゆき

○人こそあだに——花はあだなものであるが
○いづれをさきと——花が散つて戀ひるのと人が死んで戀ひるのと

色もかも昔むかしのこさに、ほへどもうゑけむ人のかげぞ戀しき

河原の左のおほいまうちぎみの、身まかりてのちのち、かの家にまかりてありけるに、しほがまといふ所のさまをつくれりけるをみてよめる

貫之元

○うらさびしく——浦をかける

きみまさで煙たえにし、ほがまのうらさびしくもみえわたるかな

○みえわたる——舟にて渡るのをかける
○さうし——曹司。出仕する部屋

藤原朝基 高直公兄のとしもとの朝臣の右近中將にてすみ侍りけるさうしの、みまかりてのち人もすまずなりにけるに秋の夜ふ

○ことならば——ことならさかすはあらぬ
(三五頁)を見よ

けて物よりまうできけるついでに見いれければ、もとありしせんざいもいとしげくあれたりけるを見て、はやくそこにすみ侍りければ、むかしを思ひやりてよみける
みはるのありすけ源行

君がうゑしひとむらす、き虫のねのしげき野べともなりにける哉
これたかのみこの、ち、の侍りけむ時によめりけむうたどもと、こひければ、かきておくりけるおくりよみてかけりける
とも のり

ことならばことのはさへもきえな、むみれば涙のたぎまさりけり
題しらず
よみ人しらず

○なき人のやど云々——時鳥を冥途の鳥といへば、この世にない人の宿に通ひ行かない人の心にもかけて郭公に因んぬ
○詞にも心にもかけて郭公に因んぬ
○白雲のたつの野原

なき人のやどにかよは、郭公かけてねにのみなくとつげなむたれみよと花さけるらむ白雲のたつとはやくなりにし物を

○式部卿のみこ——宇
多帝の皇子
○帳のかたびら——御
帳臺に懸ける帳の布帛
○むかしのて——故人
の筆

式部卿のみこ、閑院の五のみこにすみわたりけるを、い
くばくもあらで女みこの身まかりにける時に、かのみこ
すみける帳のかたびらのひもに、ふみをゆひつれたりけ
るをとりて見れば、むかしのてにてこのうたをなむかき
つれたりける

○かずく——くれ
も。なににつけて

○かずく——に我をわすれぬ物ならば山の霞をあはれとはみよ
をとこの、人のくに、まかれりけるまに、女にはかにや
まひをして、いとよわくなりける時、よみおきて身ま
かりにける
よみ人しらず

○こゑをだにきかて——
夫に見守られないで
○たま——たましひ
○君ぞかなしき——こ
の「かなし」は深い愛
の心を含んでゐる

こゑをだにきかでわかる、たまよりもなきとこにねむ君ぞかなしき
やまひにわづらひ侍りける秋、こ、ちのたのもしげなく
おぼえければ、よみて人のもとにつかはしける

大江千里

もみぢ葉を風にまかせてみるよりはかなき物はいのちなりけり
身まかりなむとてよめる
藤原これもと

露をなどあだなる物とおもひけむわが身も草におかぬ許を
やまひしてよわくなりける時よめる
なりひらの朝臣

○つひにゆくみちとはかねてき、しかど昨日けふとはおもはざりしを

かひのくに、あひしりて侍りける人とぶらはむとて、
まかりけるを、みちなかにてにはかにやまひをして、い
ま／＼となりければ、よみて京にもてまかりて、は
にみせよといひて、人につけ侍りけるうた

ありはらのしげはる

かりそめのゆきかひちとぞ思ひこし今はかざりのかどでなりけり

哀傷哥

●わ——或る物に「わ
ま」といふのを見た母
を今日の如く發音しな
かつた時代があつたの
をすることができ
○ゆきかひち——往反
の道に、甲斐路を寄せ
る

古今和歌集卷第十七

雑哥上

題しらず

よみ人しらず

○露ぞおくなる喜
 びのことと雨露の恵の
 意
 ○たまく惜しさを立
 たつことの借しさを立
 派な唐錦をむざくと
 立ちきる情しさに借り
 ていふ。たつは或は座
 を立つとも「まく」は
 「ん」の延
 ○たもとゆたかに
 扶をひろく載て
 時の別なきわかね
 ○紫のひととゆえに
 紫草が一本あるた
 めに
 ○みながら—みなな
 がらこの歌から紫のゆか
 りといはれてゐる

わがうへに露ぞおくなるあまの河とわたる舟のかいのしづくか
 ○おもふどちまどあせる夜は唐錦たまくをしき物にぞ有りける
 うれしきをなに、つゝまむ唐衣たもとゆたかにたてといはましを
 限りなき君がためにとをる花は時しもわかぬ物にぞありける
 ある人のいはく、この哥はさきのおほいまうちぎみの
 なり
 ○紫のひととゆるにむさしの、草はみながらあはれとぞみる

○めのおとうと—妻
 の妹も侍りける—妻
 ○もつてをる—抱
 ○うへのきぬ—抱
 ○むらさきの色こきと
 きは—自分の妻を愛
 する時は—右の歌によ
 つていふ
 ○わかれざりける—愛
 をうけつす
 ○宰相—参議の唐名
 ○そめぬ—抱にすべきぬの
 あや—綾細

めのおとうとをもて侍りける人に、うへのきぬをおく
 るとてよみてやりける
 なりひらの朝臣
 むらさきの色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける
 大納言ふぢはらのくにつねの朝臣、宰相より中納言にな
 りける時に、そめぬうへのきぬあやをおくるとてよめる
 近院右のおほいまうちぎみ
 于時大納言右大將皇太子傳

○色なしと—みにく
 しいそれな—なむま
 つい—石上並松の物部
 兵。石上の布留の社を
 まつる

○やぶしわかねば—
 敷原まで分け隔てなし
 に照すから石の上は
 敷ふるといふので古いと
 ころを敷にたとへたの
 である

色なしと人やみるらむ昔よりふかき心にそめてし物を
 いそのかみのなむまつが、宮づかへもせで、いそのかみ
 といふ所にこもり侍りけるを、にはかにかうぶりたまは
 れりければ、よろこびいひつかはすとて、よみてつかは
 しける
 ふるのいまみち
 日の光やぶしわかねばいその神ふりにしさとに花もさきけり

きのともものり

蟬のはのよるの衣はうすけれどうつりがこくもにほひぬるかな

題しらず よみ人しらず

おそくいづる月にもあるかな足引の山のあなたをしむべらなり

○わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月をみて

なりひらの朝臣

○おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

月おもしろしとて、凡河内躬恒がまうできたりけるによ

きのつらゆき

かつみれどうとくもあるかな月影のいたらぬさとあらじと思へば

池に月のみえけるをよめる

ふたつなき物と思ひしをみなそこに山のはならでいづる月かけ

○うすけれど——うすくて貧弱ではあるが
○うつりがこく——芳心はこもつてゐる。實際にたきしめの香もあつたものか
○わが心云々——この歌は單なる主観歌であつて傳説は直接の關係がない
○おほかたは——並大抵のことでは。輕卒には

○いたらぬさとあらじとおもへば——獨占せれば満足せぬ心。一つの抒情である

○雲のみを——天河といふのによつて水尾は雲からなつてゐるやうが雲のたちは早いものなればこのみをはさも早いであらう
○ひかりとどめず——光を下界にさすひまもなく
○山もと——西の、山の麓
○田むらのみかど——文徳天皇
左の頭註は原本にあるまゝである

○藤別子——系圖には則子

あまのかは雲のみをにてはやければひかりとどめず月ぞながる、
あかずして月のかくる、山もとはあなたおもてぞ戀しかりける
これたかのみこの、かりしけるにまかりてともまかりて、やどり
にかへりて、よひとよさけをのみ、物がたりをしけるに
十日あまより一日元
十一日の月もかくれなむとしけるをりに、みこゑひてう
ちへいりなむとしければよみ侍りける なりひらの朝臣
○あかなくにまだきも月のかくる、か山のはにげていれずもあらなん
田むらのみかどの御時に、齋院に侍りけるあきらけいこ
のみこを、は、あやまちありといひて、齋院をかへられ
むとしけるを、そのことやみにければよめる

あま 敬 信 よるかの朝臣母の

○ながをか——山城國
乙訓郡

なりひらの朝臣のは、伊豆内親王 桓武皇女 貞觀三年九月薨のみこ、ながをかにすみ侍りける
時に、なりひら宮づかへすとて、時々もえまかりとぶら
はず侍りければ、しはすばかりに、は、のみこのもとよ
り、とみのこと、てふみをもてまうできたり、あけてみ
れば、コトゴトハことば、なくて、ありけるうた

○さらぬわかれ——去
りがたいわかれ。死別

○おいぬればさらぬわかれもありといへばいよ／＼見まくほしき君かな
返し 　　なりひらの朝臣

○白雪——白髪を含め
ていふ
○かへる／＼も——返
す／＼も。ぼんにく

世中にさらぬわかれのなくもがなちよもとなげく人のこのため
寛平御時ささいの宮の哥合のうた 　　ありはらのむねやな
白雪のやへふりしけるかへる山かへる／＼もおいにけるかな
おなじ御時、うへのさぶらひにて、をのこどもにおほみき

○あそび——普通に管
弦のこと。詩歌管弦の
こともいふ

たまひて、おほみあそびありけるついでに、つかうまつ
れる 　　としゆきのおそむ、

○せめきけむ——責め
来けむ。聞ぎけむとの
説もある

おいぬとてなどかわが身をせめきけむおいずばけふにあはまし物か
題しらず 　　よみ人しらず

○今日に——今日の結
構なお遊びに
○ちはやぶる——橋姫
は神であるのでかくい
ふ
○なれをしぞ——船を
しぞ、旅をしぞの類

ちはやぶるうぢのはしもりなれをしぞあはれとは思ふとしのへぬれ
ば 　　よみ人しらず

○梓弓——射るに聯想
して磯にかける

我みてもひさしくなりぬすみのえの岸の姫松いくよへぬらむ
住吉の岸のひめ松人ならばいくよかへしと、はまし物を
梓弓いそべのこ松たが世にかよろづよかねてたねをまきけん
このうたはある人のいはく、かきのもとの人まろが也
かくしつ、世をやつくさむ高砂のをのへにたてる松ならなくに

藤原おきかぜ

○松も——松は古いが

古今和歌集卷第十七

一九六

〇たれをかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに

よみ人しらず

〇わたつ海のおきつ鹽
あひに——この歌は述
懐の歌である
〇わたつみのかざしに
みは海神——このわたつ
みは海神
〇ゆへる——ゆひめぐ
らしてゐる
〇あまごろも——雨か
らたみのゝ義にかける

〇わたつ海のおきつ塩あひにうかぶあわのきえぬ物からよる方もなし
わたつうみのかざしにさせる白妙の浪もてゆへるあはぢしま山
わたの原よせくるなみのしば／＼も見まくのほしき玉津島かも
なにはがたしほみちくらしあま衣たみの、しまにたづなきわたる

つらゆきがいつみぬくに、侍りける時に、やまとよりこ

えまうできて、よみてつかはしける 藤原たゞふさ

きみをおもひおきつのはまになくたづのたづねくればぞありとだにき

く

返し

つらゆき

おきつなみたかしのはまの濱松のなにこそ君をまちわたりつれ

〇おきつのはまになく
たづの——尋れを誘ひ
出すためであるが和泉
は海の國であるので因
んでいふ
〇ありとだにきく——
あるといふことだけで
もきける。或はありは無事
にある。或はありは無事
しやの如く解釋すべき
ものか
〇たかし——波が高い
をうけてゐる。和泉國
泉北郡

なにはにまかれりける時よめる

なにはがたおふる玉もをかりそめに元のあまとぞ我はなりぬべらなる

あひしれりける人の、すみよしヲテにまうでけるによみてつ

かはしける

みぶのたゞみね

すみよしとあまはつぐともながるすな人忘草おふといふなり

なにはへまかりける時、たみの、しまにて雨にあひてよ

める

つらゆき

雨によりたみの、しま一本にきたれどもをけふゆけどなにはかくれぬ物にぞ有りける

法皇、にしかはにおはしましたりける日、つるすにたて

りといふことを、だいにてよませたまひける

あしたづのたてる河邊を吹く風によせてかへらぬなみかとぞみる

中務歌聖後式部卿のみこの家の池に、舟をつくりて、おろしはじめて

〇中務のみこ——宇多
天皇皇子

雜 哥 上

一九七

〇かりそめの——苜を
かけていふ
〇あまとぞ——なる——
海の氣分にひたること
を誇張していふ
〇すみよし——住み良
しの心をかける

〇雨により——雨がふ
るので

〇なにはかくれぬ——
義といふ名に隠れるこ
とはできぬ。難波をき
かせてある

〇にしかは——山城大
堰川。御幸は延喜七年
九月

あそびける日、法皇御覽じにおはしましたりけり、ゆふ上元
さりつかた、かへりおはしまさむとしけるをりに、よみ
てたてまつりける
伊 勢

水のうへにうかべる舟の君ならばこゝぞとまりといはまし物を
からこと、いふ所にてよめる 眞せい法し
宮こまでひゞきかよへるからことは浪のをすげて風ぞひきける
ぬのひきのたきにてよめる 在原行平朝臣

○こきちらすたきの白玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかるもせひ元
布引ホリのたきのもとにて、人々あつまりて哥よみける時に
よめる なりひらの朝臣
ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに
よしのゝたきをみてよめる 承均法師

○からこと——備前。
物名のところに出てゐ
た

○きよ瀧——山城國高
雄山の麓の清瀧川
○山わけ衣——山をゆ
く時の衣。清淨である
べき山わけ衣を清い瀧
の白糸にて縫ふとの心
○龍門——リウモン。
大和國吉野郡の龍門寺

○たちぬはぬきぬきし
人——仙人をいふ。無
縫の天衣をきた人との
心
○朱雀院のみかど——
宇多上皇

○ぬしなくて——主が
ないから無縫でかりて
縫女に借せよう
○たなばたに——七月
七日に因んでいふ

たがためにひきてさらせるぬのなれやよをへてみれどとる人もなきたしえ

題しらす

神たい法し

きよたきのせゞのしらいとくりためて山わけ衣おりてきましましを

龍門にまうでゝ、たきのもとにてよめる

伊 勢

たちぬいせはぬきぬきし人もなき物をなに山姫のぬのさらすらん

朱雀院のみかど、ぬふる元のひきのたき御覽ぜむとて、ふむ月

のなぬかの日おはしましてありける時に、さゆら元ふらふ人々

に哥よませ給ひけるによめる たちばなのながもりちま

ぬしなくてさらせるぬのをたなばたにわが心とやけふはかさまし

ひえの山なる、おとはのたきをみてよめる

たゞみね

○將監——少將の次で
將曹の上。六以上

○あまびこの——ぼん
やりとしてゐるところ
におとづれをうけて正
氣になつたとの心

○いでがてにする——
社會に出るのをしぶり
がちにする。出世し難
い心をふくめていふ

○東宮——醍醐天皇の
皇子保明親王

○このもとごに——木
の本ごととに。このもか
のものとあるわけごと
の意
○春のみ山——春宮の
心をかける。春はみ山
もしげるの意もある
○時なりける人——時
めいた人

左近將監とけて侍りける時に、女のとぶらひにおこせた、
りける返事に、よみてつかはしける。をの、はるかぜ

○あまびこのおとづれしとぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世に

つかさとけて侍りける時よめる 平さだふむ

うき世にはかどさせりともみえなくになどかわが身のいでがてにする
ありはてぬ命まつまの程ばかりうきことしげくおもはずもがな

みこの宮のたちはきに侍りけるを、宮づかへつかうまつ

らずとて、とけて侍りける時よめる みやぢのきよき

つくばねのこのもとごととにたちぞよる春のみやまのかげを戀ひつ、

時なりける人の、にはかに時なくなりてなげくを見て、

みづからのなげきもなく、よろこびもなきことを思ひて

よめる

清原深養父

○ひかりなき谷には春もよそなればさきてとくちる物思ひもなし

かつらに侍りける時に、七條中宮のとはせ給へりける御

返事にたてまつりける 伊 勢

久方のなかにおひたるさとなればひかりをのみぞたのむべらなる

きのとしさだが阿波のすけにまかりける時に、むまのは

なむけせむとて、けふといひおくれりける時に、こゝか

しこにまかりありきて、夜ふくるまでみえざりければつ

かはしける なりひらの朝臣

今ぞしるくるしき物と人またむさとをばかれずとふべかりけり

これたかのみこのもとに、まかりかよひけるを、かしら

おろして、をのといふ所に侍りけるに、正月にとぶらは

雑歌下

二〇七

○さきてとくちる——
一時はさかえてもすぐ
にちるの意

○かつら——山城國葛
野郡

○七條中宮——宇多天
皇の中宮。基經女皇子

○久方のなかにおひた
る——桂の里。こゝで
は久方が直ちに空の義
となる

○ひかりをのみぞ——
中宮を光にたとへる

○けふといひおくれり
ける時——出發は今日
だといふのでおくらう
とした時

○くるしき物と——こ
れにて句

○人またむさとをば——
されば私も、人を思つ
てゐるところは疏にせ
ずによく〜とはれば
ならぬ

○つれづれとして
みこの様子をいふか。
然るときは「物がなし
く」作者の主観となる。
或はその場面が「つれづ
れさうに見えたのか

○野とならば——清輔
本に「或本ニフルノイ
マミチガ哥」
○かりにだにやは君は
こざらん——かりにも
こないであらうか。狩
の心をかけていふ。
○我を君なにはの浦
とも思はないを難波に
かける
○うきめをみつ——浮
海草を憂き目に、見つ
を御津にかける
○あま——尼と海人

むとてまかりたりけるに、ひえの山のふもととなりければ、
いとふか^{たか}りけり、しひてかのむろにまかりいたりて
をがみけるに、つれづれとしていと物がなしくて、かへ
りまうできて、よみておくりける

○わすれては夢かと思ふおもひきや雪ふみわけて君をみむとは
深草のさとにすみ侍りて、京へまうでくとて、そこなり
ける人によみておくりける

としをへてすみこしさとをいで、いなばいと深草のとやなりなむ
返し
よみ人しらず

野とならばうづらとなきて年はへむかりにだにやは君はこざらん
題しらず

○我を君なにはの浦にありしかばうきめをみつのあまとなりにき

この哥はある人、むかしをそこありけるをうなの、を
とことはずなりにければ、なにはなるみつのてらにま
かりて、あまになりて、よみてをそこにつかはせりけ
るとなむいへる

返し

なにはがたうらむべきまもおもほえずいづこをみつのあまとかはなる
題シラズ
元 讀人不知

今更にとふべき人もおもほえずやへむぐらしてかどさせりてへ
ともだちの、ひさしうまうでこざりけるもとによみてつ
かはしける
み っ ね

水のおもにおふるさ月のうき草のうきことあれやねをたえてこぬ
人をとほで、ひさしうありけるをりに、あひうらみけれ

○なにはがた——うら
むにかける
○うらむべきまもおも
ほえず——怒の心が起
きるほど日数も關係し
てゐたやうに思はれな
い
○いづこをみつの——
どこを見てうらんだの
か
○とふべき人もおもほ
えず——訪うて下さる
人があるとも思はれな
い
○てへ——といへ
○あひうらみければ—
—お互にうらみをいひ
あふ

世中はいづれかさしてわがならむゆきとまるをぞやどさだむる
相坂（元）の嵐のかぜはさむけれどゆくへしらねばわびつゝぞぬる（元）

○風のうへにありかさだめぬちりの身はゆくへもしらずなりぬべらなり
家をうりてよめる 伊 勢

あすかがはふちにもあらぬわがやどもせにかはりゆく物にぞありける
つくしに侍りける時に、まかりかよひて、ごうちける人
のもとに、京にかへりまうできてつかはしける
きのともりの

ふるさとは見しごともあるはずをのゝえのくちし所ぞ戀しかりける
女ともだちと物がたりしてわかれてのちにつかはしける
みちのゆく

○あかざりし袖のなかにやいりにけんわがたましひのなき心ちする

○いづれかさしてわがならむ——どこを名ざして行けばわがおちつくところであらう
○ゆくへしらねば——どこにも行くところがなから、しかたなくこゝにわびつゝもすむ
○ちりのみは——ちりは連用名詞

○ごうちける人——任防逃異記に晋王賢伐木。至信安郡石室山。見數童子圍碁。與賢一物。如棗核。食之不飢。局未終。斧柯爛盡。既歸無復時人

○もろこしのはう官——遣唐使の判官。三等官

○なよ竹——しの竹
○なよ竹の——竹のよ（節と節との間）を夜にかける
○おきみて——霜の置くのを起きて居てにかける
○風ふけばおきつ白浪——白浪がたつを立田山にかけ浪につけて風をそへる。白浪は盗人が出て恐しい山といふ説もあるが、歌としてはふさはしくない。たゞ立田山は険しい故そこを夜中に一人で越えるのを思ひやつたものと見てよい

寛平御時に、もろこしのはう官にめされて侍りける時にさす
東宮のさぶらひにて、をのこどもさけたうべけるついで
によみ侍りける
ふぢはらのたゞふさ

なよ竹の夜ながきうへにはつ霜のおきみて物を思ふ比かな
題しらず
よみ人しらず

○風ふけばおきつ白浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらん
ある人、このうたは昔やまとのくになりける人のむすめに、ある人すみわたりけり、この女おやもなくなりて、家もわろくなりゆくあひだに、このをとこかふちのくに、人をあひしりてかよひつゝ、かれやうにのみなりゆきけり、さりけれどもつらげなるけしきもみえでかふちへいくごとに、をとこの心のごとくにしつゝ、

○あまびこの——おと
 にかける
 ○あまびこの……おも
 ひみだれて……春歌
 ○さみだれの……夏歌
 もれざめて……夏歌
 ○からにしき……見
 のぶ……秋歌
 ○神な月……猶きえか
 り……冬歌
 ○ふる雪の猶きえか
 としかへるの心もある
 ○時につけつ……四
 季の景物につけつ
 ○ことをいひつゝ
 片一方では
 ○世の人の——人間性
 をもつた人。以下無歌
 ○あかずして……上下
 にかゝる。下は離別と
 獨旅
 ○ふちごろもおれる心
 も……哀傷
 ○やちぐさの……物名
 ごとくに……雑
 ○いせの海の浦のしほ
 が……拾ひ
 つめるが……拾ひ
 ○たまのの……拾ひ
 なく短いの……拾ひ
 ○おもひあへず……任
 に堪へぬ

あまびこの おとはの山の 是るがすみ おもひみだれて
 さみだれの 空もとゞろに さよふけて 山ほとゝぎす
 なくごとくに たれもねざめて からにしき たつたの山の
 もみぢ葉を 見てのみしのぶ 神な月 しぐれノゝて
 冬の夜の 庭もはだれに 是る雪の 猶きえかへり
 としごとくに 時につけつゝ あはれてふ ことをいひつゝ
 きみをのみ ちよにといはふ 世の人の おもひするがの
 ふじのねの もゆるおもひも あかずして わかるゝなみだ
 ふちごろも おれる心も やちぐさの ことのはごと
 すべらぎの おほせかしこみ まきノゝの 中につくすと
 いせの海の 浦のしほがひ ひろひあつめ とれりとすれど
 たまののの みじかき心 おもひあへず猶あらたまの

○かへり見もせぬ
 一生懸命にやつたとの
 心。禹が九國の水を治
 めて門を過ぎて我が家
 に入らなかつた故事に
 よるか
 ●たてまつりける
 宮内省本のまゝである
 静嘉堂文庫本は「たて
 まつれる」

○世々のふるごとなか
 りせば——先例がなか
 ったら
 ○のばへ——のべの延
 ○身はしもながら——
 人丸は下官でありなが
 ら
 ○ちりにつけとや——
 古の迹を繼げとや
 *この二句流布本に
 ある。宮内省本、静嘉
 堂文庫本、清輔本、嘉
 祿本等にはない

としをへて 大宮にのみ ひさかたの ひるよるわかず
 つかふとて かへり見もせぬ わがやどの しのぶ草おふる
 いたまあらみ 是る春雨の もりやしぬらん
 ふるうたにくはへてたてまつりけるながうた
 くれたけの 世々のふるごと なかりせば いかほのぬまの
 いかにして おもふこゝろを のばへまし あはれむかしべ
 ありきてふ 人まるこそは うれしけれ 身はしもながら
 ことの葉を あまつ空まで きこえあげ すゑの世までの
 あとゝなし 今もおほせの くだれるは ちりにつけとや
 ちりの身に つもれることを とはるらむ これをおもへば
 いにしへも くすりけがせる けたものゝ 雲にほえけむ

壬生 忠 岑

雑體 短哥

しらゆきの つもりくゝて あらたまの としを^{もあまた元}あまたも
すぐしつるかな

七條のきささきうせたまひにけるのちによみける

延喜七年六月八日册三十六

伊勢

おきつなみ あれのみまさる みやのうちは^元としへてすみし
伊勢のあまも 舟ながしたる 心ちして よらむ方なく
かなしきに 涙の色の くれなるは われらがなかの
時雨にて 秋のみぢと ひとくは おのがちりく
わかれば たるむかげなく^本 なりはて、 とまる物とは
花すゝき 君なき庭に むれたちて 空をまねかば
はつかりの なきわたりつ、 よそにこそみめ

○おきつなみ——あれ
るにかける
○あれのみまさる——
宮の失せ給うたために
いふ
○としへてすみし伊勢
のあまも——長い間海
になれてゐた海人も。
伊勢はこの宮に仕へて
ゐたことがある。伊勢
の海はわが名をかけて
いふ
***この四句宮内省
本に缺けてゐる
○花すゝき——作者の
心をうつしていふ
○はつかりの——僅か
に初雁のみが

旋頭哥

題しらず

讀人しらず

うちわたすをちかた人にものをすわれそのそこにしろくさ
けるはなにの花ぞも

返し

春されば野べにまづさくみれどあかぬ花^{は元}まひなしにた^本な
るべき花のな、れや

題しらず

はつせ河ふるかはのべにふたもとあるすぎとしをへてまたも
あひみむふたもと^{わら元}あるすぎ

つらゆき

○旋頭歌——セドウカ
普通には五七七、五七
七である。五七七とよ
五七七 七と上に
五七七 かへるので
旋頭といひ相似形をつ
くるので雙本ともいふ
稀には五七五七七、
五七五七七もある
○うちわたす——遠い
所を見渡していふ語
○ものまをすわれ——
われ物申す
○まひなしに——まひ
なひなしに
○この花は梅をいふ

●ハツカゼハ——ハツ
セガハの順序をおきか
へるとハツカゼハにな
る

●さす——ます——さをまの一態に誤寫し、更に「ま」とかいてしまつたものか

君がさすみかさの山のもみぢばの色神な月時雨の雨のそめるし元なりけり

躬 恒

*この一首元永本にある

マスカバミソコナルカゲニムカヒキテミル時ニコソシラスオ
キナニアフ心地スレ

誹諧哥

題しらず

讀人しらず

○むめの花見にこそきつれ鶯のひとくくといとひしもをる

素性法師し元

山吹の花いろ衣ぬしやたれとへどこたへずくちなしにして

○誹諧——誹は俳にて戲の義。歌の調子は一般にまじめなものであるがそれに對してユーマーのあるものをいふ
○ひとくく——なき聲にこのやうな音があるとの心
○いとふ——人を恐れてぬし——その主の意か
○くちなし——口無し山吹のきぬをそめる山吹子をかける

藤原敏行朝臣

○いくばくの田をつくればか郭公しでのたをさをあさなあくく期ぶ

七月六日たなばたのこゝろをよみけるし元

藤原かねすけの朝臣

いつしかとまたく心をはぎにあげてあまの河原をけふやわた覽

題しらず

凡河内みつね

むつごともまだつきなくにあけぬにけり元めりいづらは秋のながしてふよは

僧正へんぜう

秋のゝになまめきたてる女郎花あなかしがまし花もひと時

よみ人しらず

秋くれば野べにたはるゝをみなへしいづれの人かつまでみるべき

あき霧のはれてくもれば女郎花はなのすがたぞみえかくれするし元

誹諧哥

二二五

○してのたをさ——郭公の異名とも鳴く聲の擬聲ともいふ。賤の田長をかけるのであらう
○あさなくよぶ——田をつくるについて田長をよんで命をうけるとの心
○またく——いそぎまたれる心。跨ぐにかけ
○今日——七日を待たず六日に
○いづらは——どこかどこに。この歌は調子の上に俳諧味がある

○つまで——花を摘まてに掴まてをよせる。人の身をつれつて思ひを知らせるのである

○そへにとて——それがよからうといつて
○かくすれば——この次に語が省かれてゐる

○世中は——擬人化していふ

○年のおもはむ——年を擬人化していふ
○やさしき——羞し
○心をさへに——心までも。だにもは心許り
○はふる——捨てる。
○或は俾るか——
○清輔本はこの歌以下がなくて十九巻を終つてゐる。一方に元永本は巻末に三首を増すことを思ふとこの巻は編と輯上に動搖があつたことをしるることができ
○み——賞をかける
○すきもの——酸きものに好色者をかける

○法皇——宇多法皇

○わびしらに——まじらの音を通して
○かひ——峽に甲斐をかける

○うつぶし——かりねのことをいふ。伏しに五倍子をかける

***この三首元永本にある

そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに
世中のうきたびごとに身をなげば深き谷こそあさくなりなめ

在原元方

よのなかはいかにくるしとおもふらんこゝらの人にうらみらるれば

よみ人しらず

なにをして身のいたづらにおいぬらん年のおもはむことぞやさしき

おきかぜ

身はすてつ心をさへにはふらさじつひにはいかゞなるとしるべく

ちざと

白雲のともわが身はふりぬれど心はきえぬ物にぞ有りける

よみびとしらず

梅花さきてのちの身なればやすき物とのみ人のいふらん

法皇にしかはにはおはしましたりける日、さる山のかひに

さけぶといふことを題にてよませたまうける

みづつね

わびしらにまじらなきそ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ

よみ人しらず

世をいとひこのもとごとにてちちよりてうつぶしそめのあさのきぬなり

人ノ牛ヲツカヒケルガ、死ニケレバソノ牛ノメシノモト
ニヨミテツカハシケル

源宗岳 撰

ワガノリシ事ヲウシトヤオモヒケム草葉ニカ、ル露ノイノチヲ

ヨミ人シラズ

イカニシテコレヲカクサムクレナキノヤシホノ衣マクリデニシテ

射 恒

テル月ヲ弓張トシモイフコトハヤマノ葉サシテイレバナリケリ

辨 詔 哥

家々稱證本之本乍書入以墨滅哥 今別書之

卷第十 物名部

ひぐらし

つらゆき

そま人は宮木ひくらし足引の山の山びこよびとよむなり

在郭公下 空蟬上

勝 臣

かけりてもなにをかたまのきててもみむからはほのほとなりにし物を

をがたまの木 友則下

くれのおも

つらゆき

こし時と戀ひつゝをればゆふぐれのおもかげにのみみえわたる哉

忍草 利貞下

おきのゐ みやこしま

をのゝこまち

○かけりても——走つてかへつても。一度死んだ人の魂が再びこの土にかけりかへつても
○たま——魂
○から——體

○おき——織にもえる火

○ゐて——我身の上にある。据ゑて

○宮こしまべの——京と鳥べとに

○そめどの——染殿。もと良房の家であつたが、のち清和天皇の外宮となつた

○あはた——栗田

○あはたつ——淡立つと栗田

○相坂山——逢うても
……の心

おきのゐて身をやくよりもかなしきは宮こしまべのわかれなりけり

からこと 清行下

そめどの あはた

あやもあ

うきめをばよそめとのみぞのがれゆく雲のあはたつ山のふもとに

このうたは水ナシののみかどの、そめどのよりあはたへ

うつりたまうける時によめる

桂宮下

卷第十一

奥山のすがのねしのぎふる雪下

けふ人をこふる心は大井河ながるゝ水におとらざりけり

わざもこに相坂山のしのすゝきはにはいでも戀ひわたる哉

卷第十三

家々稱證本之本乍書入以墨滅哥

○いぬかみのこの山
 近江國犬上川床の
 山
 ●なとり河——流布本
 にはいさや河とあつて
 いさにかゝる。元永本
 はいさら川。なとり河
 にてはつゞかない

戀ひしくばしたにをおもへむらさきの下

いぬかみのこの山なるなとり河いさとこたへよわがなもらすな

此の哥ある人の、あめのみかどのあふみのうねめにた

まへると

返し

うねめのたてまつれる

山しなのおとはのたきのおとにだに人のしるべくわがこひめやも

卷第十四

おもふてふことの葉のみや秋をへて下

そとほりひめの、ひとりゐてみかどをこひたてまつりて

○わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも

深養父、戀しとはたがなづけゝむことならん下

つらゆき

みちしらばつみにもゆかむすみのえのきしにあふてふこひわすれ草

古今和歌集序

紀 淑 望

夫和歌者、託其根於心地、發其華於詞林者也。人之在世、不能無爲、思慮易遷、哀樂相變、感生於志、詠形於言、是以逸者其聲樂、怨者其吟悲、可以述懷、可以發憤、動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、莫宜於和歌。和歌有六義、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌。若夫春鶯之轉花中、秋蟬之吟樹上、雖無曲折、各發哥謠、物皆有之、自然之理也。然而神世七代、時質人淳、情欲無分、和歌未作、逮于素戔烏尊、到出雲國、始有三十一字之詠。今反哥之作也。其後雖天神之孫、海童之女、莫不以和歌通情者、爰及人代、

○逸——よろこぶの意
 ○風雅頌はその性質上
 ○詩、雅頌は朝廷の詩、頌
 ○祭、賦は作詩上の分
 ○類、比興は作詩上の分
 ○は、賦、興、比、興、分
 ○外、物、を、信、る、間、接、表、現、は
 ○興、は、本、義、と、外、義、と、を、並
 ○叙、す、る、も、の、て、ある、を、並
 ○出、見、神、之、孫、彦、火、々
 ○天、童、之、女、豐、玉、姫
 ○海、童、之、女、豐、玉、姫
 ○を、云、ふ、二、方、の、間、に、ヒ
 ○コ、ナ、ハ、セ、タ、ケ、ウ、ガ、ヤ、フ
 ○キ、ア、ハ、セ、ズ、ノ、ミ、コ、ト、ガ
 ○生、れ、る、姫、は、み、こ、と、を
 ○の、生、れ、る、御、ち、に、海、に、歸、る
 ○オ、キ、ツ、ド、リ、カ、モ、ツ、タ

*この名は筋切にはな

○野宰相——參讀小野
 篁
 ○輕情——文粹には雅
 情
 ○在納言——中納言在
 原行平

將富餘金錢而骨未腐於土中。名先滅世上。適爲後世被
 知者。唯和哥之人而已何者。語近人耳。義貫慣神明也。昔
 平城天子詔侍臣。令撰萬葉集。自爾以來。時歷十代。數過
 百年。其後和哥棄不被採用。雖風流如野宰相。輕情如在
 納言。而皆以他才聞。不以斯道顯。

陛下御宇天下。于今九載。仁流秋津洲之外。惠茂筑波山之陰。
 淵變爲瀨之聲。寂々閉口。砂長爲巖之頌。洋々滿耳。思繼
 既絕之風。欲興久廢之道。爰詔大內記紀友則。御書所預
 紀貫之前。甲斐少目凡河內躬恒。右衛門府生壬生忠岑
 等。各獻家集。並古來舊哥。曰續萬葉集。於是重有詔。部類
 所奉之歌。勒爲二十卷。名曰古今和哥集。臣等詞少春花
 之艷。名竊秋夜之長。況哉進恐時俗之嘲。退慙才藝之拙。

●十八日——靜嘉堂文
 庫の頓阿本及び筋切は
 十五日

適遇和哥之中興。以樂吾道之再昌。嗟乎人丸既沒政。和哥
 不在斯哉。于時延喜五年歲次乙丑四月十八日。臣貫之
 等謹序

此集家之所稱雖說多且任師說又
加了見爲備後學之證本不顧老
眼之不堪手自書之
近代僻案之好士以書生之失錯稱
有識之秘事可謂道之魔姓不可
用之但如此用捨只可隨其身之所好
不可存自他之差別志同者可隨之

貞應二年七月廿二日癸亥

戶部尙書藤

同廿八日令讀合訖書入落字了

傳于嫡孫可爲將來之證本

此古今奉附屬良守上人了

文和二年三月十八日

西方行者頓阿

作者略傳及人名索引

ア

アカヒト 赤人
 山部氏。萬葉集に載つてゐる歌は神龜元年(一三八四)から天平八年(一三九六)までの間である。序に人丸赤人を並べたのは家持が山柿の門といつたのに依るといふ説があり、或は山は山上憶良であらうといふ説もある。序の書きやうでは人丸よりは少し劣つてゐたと考へられてゐたのであらうといふ説がある。自然をよむ歌人として後世に影響が多い
 序、一〇、二四四
 アキミネ 秋岑
 紀氏。善峯の子
 歌 四八、八〇
 アキラケイコ 慧子
 文徳天皇の御子。嘉祥三年齊院
 詞 一九一
 アキラケイコノハ、慧子母

詞 一九一
 アサヤス 朝康
 文屋氏。康秀の子。延喜二年二月廿三日大舍人大允
 歌 五九
 アヅマビト 東人 中臣氏
 歌 一五六
 アツユキ 篤行
 平氏。興我王の子。延喜三年正月從五位下、九年九月太宰少貳。十年正月卒
 歌 一一二
 アツユキ 淳行
 伊香(イカゴ)氏
 歌 九二
 アツユキノアツン
 歌 五八、六〇、六二
 アツヨシ 敦慶
 註 一八四
 アマツカミノミマゴ 天神之孫
 序 二四二

アマネイコ 治子
 春澄氏。善繩の子。仁和三年正月八日從四位下掌侍、延喜二年正月九日從三位
 歌 三九
 アメノミカド 天智天皇の御事
 歌 一五四、一六三、二四二
 アヤモチ
 元永本には山もちとあり、宮内省の頼阿本には作者名がない
 歌 二四一
 アリスケ 有輔
 御春氏。延喜二年二月廿三日左衛門權少志、十二年三月廿七日權少尉。敏行の家人にて河内國の人といふ
 歌 一四〇、一八三
 アリスエ 有季
 文屋氏
 歌 二一四
 アリツネ 有常
 紀氏。貞觀十五年正月七日從五位下、元

慶元年周防權守

歌 一〇七
 アリツネノムスメ 有常女
 歌 一六八
 アリトモ 有朋 又は有友
 紀氏。元慶三年正月七日從五位下、八月十七日宮内少輔。四年卒
 歌 三一、二二七 詞 一八三
 アリホ 有穂
 註 三九

イ

イウセン 爾仙
 藤原氏。尊卑分脈には爾仁とある。總繼の孫にて宗道の子。寛平七年十月律師。昌泰三年二月寂。延暦寺の座主
 歌 九七、九八
 イセ 伊勢
 藤原氏。繼蔭の女。七條後の女房。寛平の間更衣にて皇子を生んだ。後に敦慶親王との間に中務を生んだ
 歌 二四、二六、三〇、三一、四五、一五、一四九、一五〇、一五八、一六〇
 ・ウネメ 采女(近江)

作者略傳及人名索引

一六四、一六七、一七〇、一七三、一九八、一九九、二〇七、二二二、二二五、二二二、二三〇
 イルタ 至
 註 二一一
 イトナイシンワウ 伊豆内親王
 註 一九四
 イナバ 因幡
 仲野親王の孫にて、基世王の女。基世王は仁和五年正月因幡守
 歌 一七三
 イマミチ 今道
 布留氏。元慶六年從五位下、寛平十年正月三河介
 歌 六〇、一八七、二〇三

ウ

ウツク 籠
 大納言定の孫にて、大和守精の女
 歌 九三、一四三、一六〇
 ウネメ 采女(陸奥)
 序 三
 ・ウネメ 采女(近江)

詞 一四四、一六三
 註 一五四、二四二
 歌 一四五、一四七、一五四、一六四、二四二
 ウリンキンノミコ 雲林院親王
 常康親王。仁明天皇の第七皇子。仁壽元年二月御出家、貞觀十一年五月十四日薨去。雲林院は親王の別業であつたのを通昭に付屬して寺となされた
 歌 一六八 詞 三七、九七

オ

オキカゼ 興風
 藤原氏。濱成の曾孫にて道成の子。延喜十四年四月廿二日下總權大掾。管弦を能くした
 歌 三八、四四、五二、七六、七七、八〇、八七、一三〇、一六一、一七三、一九五、二二七、二三〇、二三二
 オト 乙
 遠江介壬生益成の女。益成は、元慶仁和の御代の人である
 歌 一〇五

オトンド 音人

註 四八

オホササギノミカド

序 三、四、(二四四)

オホツクリウシ 大津皇子

序 二四四

オホヨリ 大親

宗岳氏。算博士

歌 一三四、二二〇

詞 二一〇

カ

カゲノリノオホキミ 景式王

惟能親王の御子。寛平九年七月十三日、

從四位下

歌 一一三、一六九

カチオン 勝臣

藤原氏。發生の子。元慶七年阿波權掾

歌 六六、一一〇、一一八、二一五、二

四〇

カツラギノオホキミ

序 四

カネスケ 兼輔

藤原氏。利基の六男にて、兼茂の弟。延

長五年正月十二日從三位中納言、承平三

年二月十八日薨去、年五十七。家が加茂

川の堤にあつたので堤中納言と呼ばれ

「堤中納言物語」の作者に擬せられてゐ

る

歌 九七、一〇六、一六三、二二五

カネミノオホキミ 兼覽王

惟喬親王の御子。延長二年正月七日正四

位下、三年六月宮内卿。承平二年卒

詞 九九

歌 六一、七五、九八、一一四、一六七

カネモチ 兼茂

藤原氏。利基の三男にて兼輔の兄。延長

二十三年正月十二日參議、同廿一日左兵

衛督。同三月七日卒、陣の座にて中風を

起したのがもとであつた

歌 九五、九六

カハラノヒダリノオホイマウチギイ 河原

左大臣

歌 一五七、一八八

詞 一八一、一八二

カンキン 閑院

延喜の頃の命婦といふ

歌 一六〇、一七八

カンキンノゴノミコ 閑院五親王

廣井女王。天武天皇の後。齊衡元年正月

八日從三位、天安元年十二月尙侍。貞觀

元年十月廿三日薨、御年八十餘。或は嘉

祥三年權典侍ともいふ

歌 一八四

キ

キセン 喜撰。又は基泉。一本には撰喜

序 一三、二四五

歌 二一一

キノメノト 紀乳母

名は全子。嵯峨天皇の孫源澄の妻にて、

陽成天皇の御乳母。元慶六年正月八日從

五位上

歌 一一四、二二七

キミトシ 藤原氏

詞 九三

キヨキ 清興

宮道氏。延喜七年二月廿九日實之にかは

つて、越前權少掾に任ぜられた

歌 二〇六

キヨキ 清樹

橘氏。長谷雄の孫にて數雄の子。寛平八

年正月廿六日阿波守、昌泰二年三月卒

詞 一四六

歌 一四六

キヨトモ 清友

橘氏。奈良麿の子

歌 四二

キヨフ 清生

詞 九一

キヨユキ 清行

安倍氏。安仁の子。寛平六年正月十五日

讃岐守、同七年八月從四位上。昌泰三年

卒、年七十六

歌 一一四、一二九 註 二三一

ク

クズナホ 葛直

註 二二二

クソ 屎

歌 二三一

クニツネ 國經

作者略傳及人名索引

藤原氏。長良の長子にて基經の兄。延喜

二年正月廿六日大納言、同三年正月七日

正三位、同八年六月廿九日薨。年八十二

歌 一四二

詞 一八七

クロメシ 黒主

大友氏

序 一四、二四五

歌 三六、一五九、一九三

クワウカウテンツウ 光孝天皇

ニシノミカドを見よ

クワンビヤウノオホントキノキサイノミヤ

詞 二一、二三、二七、二九、三七、三

八、四一、四一、四四、四七、五二、五

七、六二、六三、六八、六九、七六、八

〇、八三、一二九、一四二、一四七、一

五二、一五六、一七三、一九四、二二六

二二七

ケ

ケウシン 敬信

藤原因香朝臣の母。小野千古の母とも

歌 一九一

ケンゲイ 兼盛

伊勢少掾古之二郎にして、大和城上郡の

人

歌 九八、一六六、一七二、一八九

コ

ゴデウノキサイ 五條后

詞 一六二、(二四一)

コトナホ 曾直

藤原氏。安繩の子。昌泰三年因幡掾

歌 二一

コマチ 小町

小野氏。出羽國司女

序 一三、二四五

詞 一八、二〇二

歌 四〇、一一五、一二八、一二九、一

三九、一四二、一四六、一五七、一六八

一七一、一七四、二〇二、二二七、二四

〇

コマチガアネ 小町が姉

歌 一七〇

コレサダノミコ 是貞親王

詞 五四、五四、五五、五六、五七、五

八、五九、六〇、六二、六五、六七、六八、六八、六九、七一、七四、七四、七七、一三二

コレタカノミコ 惟喬親王

文徳天皇の第一皇子。御母は紀静子、名虎女。天安二年十一月廿五日帥、貞觀十四年七月御出家、御法名算延。同十五年二月廿日薨去、御年廿六。小野宮と申す

歌 三二、二〇三 註 二〇〇

詞 一〇六、一八三、一九一、二〇七

コレノリ 是則

坂上氏。延長二年正月七日從五位下、加賀介

歌 六八、七六、八〇、八二、一三四、一七五、二〇〇

コレモト 惟範

藤原氏

歌 一八五

コレヲカ 惟岳

紀氏。或は菅原惟然。或は惟照

歌 八六

コレヲカ

藤原氏

詞 九六

コンキンノミギノオホイマウチギミ 近院右大臣

源能有。文徳天皇の第一源氏、仁壽三年源姓を賜はつた。寛平二年正三位、同八年七月十六日右大臣。寛平九年六月八日薨去、年五十三

歌 一五九、一八一、一八七

註 二一

詞 一五九

サ

サキノオホキオホイマウチギミ 前太政大臣

藤原良房のこと、冬嗣の子。天安元年二月十九日太政大臣、四月十九日從一位、貞觀二年八月十九日攝政、十三年四月十日准后。十四年九月二日薨、年六十九、忠仁公、染殿の大臣、白河の大臣

詞 一七六

歌 二〇、二八、四〇、一八六

サダカタ 定方

藤原氏。高藤の子。延長二年正月廿二日右大臣、四年正月七日從二位、八年十二月十七日左近大將。承平二年八月四日薨年六十三、贈從一位、三條右大臣

歌 六〇

サダキ 貞樹

小野氏。齊衡二年正月七日從五位上、貞觀二年正月十六日肥後守。或は橘氏にて清樹の兄か(系圖四参照)

歌 一六八、二〇一

サダクニ 定國

詞 八八

サダトキノミコ 貞辰親王

詞 八六、九一

サダトキノミコノヲバ

詞 八六

サダフン 定文

平氏。茂世王の孫にて好風の子。延喜廿二年正月七日從五位上、延長元年六月廿二日參河權介。同九月廿七日卒

歌 六二、六二、七一、一四七、一四八

一七五、二〇六、二二八

サダヤスノミコ 貞保親王

詞 八六

サマキ 讃岐

讃岐守安倍清行の女

歌 二二一

サネ 實

源氏。舒の子。寛平九年七月十三日從五位上、昌泰二年正月十一日信濃守、三年卒

詞 九五、九六

歌 九六

サルマルダイフ 猿丸太夫

序 二四五

サンデウノマチ 三條町

紀氏。名虎の女、名は静子、町は局の名か、文徳天皇の更衣にて惟喬・惟範親王の母

歌 二〇〇

サンデウノミギノオホイマウチギミ 三條右大臣

詞 六〇

シ

シゲカゲ 滋藤

作者略傳及人名索引

小野氏。仁和四年十一月廿五日從五位下

寛平五年四月廿九日掃部頭。八年卒

歌 一〇九

シキブキヨウノミコ 式部卿親王

詞 一八四

シゲハル 滋春

在原氏。業平の次男。在次の君

歌 八七、九一、一〇八、一一三、一一六、一八五

シタテルヒメ 下照姫

序 二

シタテルヒメノセウトノカミ

序 二

シチデウノチユウダウ 七條中宮

詞 二〇七、二二二

シウエン 勝延

笠氏。昌泰元年十二月十六日少僧都。延喜元年二月十八日寂、年七十五。紀氏に勝延があつて承均の兄になつてゐる(系圖三参照)

歌 一七七

シウホウ 聖寶

弘文天皇の孫にて葛野王の子。延喜元年

正月十一日東大寺の別當、二年三月廿日僧正。九年七月寂、年七十、又は七十六

歌 一一七

シロメ 白女

大江玉潤の女。攝津江口の邊に住んだ

歌 九六

シンセイ 眞勝

歌 一一四、一九八

詞 一一八

シントイ 神退

近江國滋賀郡の人

歌 一九九

ス

スガネ 菅根

藤原氏。真尚の子。昌泰二年二月十一日文章博士、宣旨を奉じて史記を講じた。延喜六年十一月從四位、後に侍從參議を兼ねた。八年七月七日卒、年五十四、侍讀の功によつて贈從三位

歌 五七

スガハラノアソン 菅原朝臣 道眞のこと

歌 七〇、一〇七

スサクノキン 朱雀院

詞 六〇、一〇七、一一一、一九九

スサノヲノミコト

序 二、二、二四三

セ

セイシン

詞 一二八

セウセンコウ 昭宣公

註 八六

セキヲ 關雄

藤原氏。内膳の孫にて眞夏の子。閑通を好み東山に籠つて林泉を愛したので東山進士と呼ばれた。承和元年の秋淳和上皇に仕へ、鼓琴に秀でてゐたので秘譜を授けられた。又草書を能くした。仁壽二年齊院長官。三年二月卒、年四十九

ソ

ソウク 承均

元慶の頃の人。紀氏に承均といふのがあつて勝延の弟になつてゐる(系圖三参照)

歌 三三、三三、一九八

ソセイ 素性

通昭の子にて、名を弘延といふ。清和天皇の御代に左近將監であつたが父が出家してから出家の子に俗人があるのかをかしいとして押して出家させられた。寛平八年雲林院行幸の日弟の由性と共に權律師を賜はり石上の眞因院に住した。昌泰元年宮瀬遊覽記に住所の名をとつて、眞因朝臣を賜つたとある。延喜中、屢々屏風をかいた

歌 二〇、二五、二七、二九、二九、三二、三三、三七、三七、三九、四〇、四三、四六、五三、六一、六二、六三、七〇、七四、七七、八七、八八、八八、一〇七、一一八、一二八、一三一、一五二、一五六、一五七、一七一、一七二、一七六、二〇三、二二四

ソトホリヒメ 衣通姫

允恭帝の妃にして、忍坂大中姫皇后の妹名は弟姫。その容姿麗妙にて、光が衣を徹したので、世の人が「ソトホシノイラツメ」ト稱した

序 一三、二四五 詞 一六五

歌 一五二、二四二

ソメドノノキサキ 築殿后

詞 二八

タ

ダイシ 太子 聖德太子のこと

序 二四四

ダイスケ 大輔

歌 二三一

ダイドウテンシ 大同天子

註 三六

タカツネ 高經

註 一六九

詞 一八一

タカツノミコ 高津親王

註 二〇五

タカフヂ 高藤

註 八八

タカムラ 簀

小野氏。岑守の子。承和元年遣唐副使に任ぜられたが大使と争つて官を停められ、隱岐國へ流された。後に召還され勅

チフル 千古 大江氏

詞 九七

チフルガハク 千古母 承和元年

歌 九〇

チウジンコウ 忠仁公

註 二八、一七六

チウウ 龐 ウツクを見よ

ツ

ツクル

註 二三一

ツネミ 經覽

阿保氏。昌泰三年五月筑博士、延喜七年正月從五位下、十二年正月十七日卒

歌 一一五

ツネナリ

詞 八八

ツネヤスノミコ 常康親王

註 一六八

ツラキ 列樹

春道氏。新名宿禰の長子。延喜二十年正月廿日壹岐守に任ぜられたがまだ發向しないうち卒した

解由長官從三位にまで至つた。仁壽二年

十二月廿二日薨、年五十一

歌 八二、一〇二、一七六、一八〇、二〇一、二〇五

序 二四六

タカコ 高世

菅野氏。眞道の子。弘仁十一年周防守

歌 三四

タスク

註 二三一

タマオン 忠臣 菅野氏

歌 一七三

タマフサ 忠房

藤原氏。廣敏の孫にて是嗣(イ興)の子。延喜十五年正月五位下、延長三年正月山城守。笛の名手て胡蝶樂を作つたといはれてゐる。延長六年十二月一日卒

歌 五五、一三一、一九六、二一三

詞 一七八

タミミネ 忠岑

壬生氏。藤原定國の隨身であつたが後左近衛番長、右衛門府生、御厨子所、攝津權大目に累遷して、六位に叙せられた

歌 七六、八三、一三六
ツラユキ 貫之

紀氏。この集の序に御書所預とある。次いで越前權少掾、内膳典膳、少内記、大内記、加賀、美濃の介、大監物、右京亮をへて、延長八年正月土佐守に任ぜられた。承平四年任が果て、歸るときの海上紀行が「土佐日記」である。天慶三年三月支那頭に任ぜられ六年正月七日從五位上に昇り八年三月木工權頭に任ぜられ九年卒した。「新撰和歌」(群書類從一五九)は勅命により古今集中の精撰歌及びその他三百六十首を採つて献上しようとしたものであるがその目的を達しなかつたものである。天慶六年以後八年以前と推定される漢文の序がある。

序 一五、一六、一六、二四六、二四七
詞 六二、九八、一九六
歌 一九、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二七、二九、三三、三四、三四、三六、三六、三七、三八、四〇、四一、四二、四三、四八、四九、四九、五一、六〇、六二、六六、六七、六

七、七一、七二、七五、七五、七八、七八、八〇、八一、八二、八三、八七、九一、九四、九四、九五、九六、九八、九八、九〇五、一〇九、一〇九、一一一、一一一、一一三、一一五、一一五、一一八、一一九、一一九、一二〇、一二一、一二一、一二三、一二三、一三三、一三三、一三五、一三五、一四一、一五〇、一五三、一五三、一五八、一五八、一七二、一七七、一七八、一七九、一八一、一八二、一八二、一九〇、一九六、一九七、二〇〇、二二〇、二二七、二二三、二四〇、二四〇、二四二

テ

・テイシノキン 亭子院

詞 三一、三六、四四、七六
テムテムツワツ 天武天皇
序 二四四

ト

トウグウ 東宮
詞 三四、三五、八九、二〇六、二二三

トキハル

註 八七

トキブミ 時文

歌 四一

トシサダ 利貞

紀氏。貞守の子。元慶三年十二月廿五日從五位下、五年阿波介。同年卒

歌 四五、九一、九一、一一二

詞 二〇七

トシハル 利春

高向氏。延喜十四年二月廿三日從五位下、延長六年正月廿九日甲斐守

歌 一一三

トシモトノアソン

詞 一八二

トシユキ 敏行

藤原氏。富士原の子。寛平九年七月十三日從四位上、九月右兵衛督。延喜七年卒或は昌泰四年ともいふ

歌 五一、五五、五八、六〇、六二、六六、六九、七四、一〇八、一二九、一三二、一三八、一三九、一四二、一八九、一九五、二二五、二二九

詞 一五四、一七七

トモノリ 友則

紀氏。延喜四年正月廿五日大内記六位。初めはこの集の撰者の棟梁であつたが、功を終へないで卒した

序 一五、二四六

詞 一七八

歌 二一、二五、二九、二九、三五、四六、四七、五二、五六、六八、六九、七〇、八二、九五、一〇〇、一〇一、一一一、一一一、一一二、一二九、一三四、一三六、一三七、一四七、一四八、一五一、一五六、一六四、一六九、一七〇、一七五、一七七、一八三、一九〇、二一一

ナ

ナイシノカミ

詞 八八

ナカキ 中興

平氏。忠望王の子。實は右大辨秀長の子といふ。延喜廿二年正月廿日美濃權守

歌 二二〇、二三〇

ナカツカサノミコ 中務親王

詞 一九七

ナカヒラ 仲平

藤原氏。基經の二男、時平の弟。寛平元年左大臣、六年正月七日正二位。八年九月一日出家して靜寛といひ同五日薨、年七十一、枇杷大臣といふ

歌 一六三 詞 一六七

ナカマロ 仲曆

安倍氏。船守の子。靈龜二年遣唐留學生(年十六)、姓名を朝衡と改め左補闕、秘書監、衛尉卿などに任ぜられた。天寶十二年遣唐大使藤原清河に具して歸朝の途に上つたが颶風に遇つて安南に漂着し、土匪の迫害をうけた。辛じて逃れて唐に還つて仕へた。大曆五年正月(我が國の寶龜元年)卒、年七十三

歌 一〇一

ナガモチ

歌 一九九

ナガモリ 長盛

橋氏。延喜廿六年從五位下長門守。文章博士直幹の父

歌 一九九

ナザネ 名實

矢田部氏。昌泰二年大内記。三年卒

歌 一一二

ナトラ 名虎

註 三二、八七

ナホイコ 直子

藤原氏。典侍、延喜二年正月九日正四位下

歌 一七二

ナムマツ

詞 一八七

ナラノミカド 奈良帝

平城天皇。大同元年三月十七日踐祚、五月即位、四年四月廿五日讓位、弘仁元年御出家。天長元年七月七日崩御、御年五十一(イジャウテンワウ、ダイドウテシシを合せ見よ)

序 九、一〇

ナリヒラ 業平

在原氏。阿保親王の子。天長三年在原の姓を賜つた。貞觀七年三月右馬頭、十九年正月左近衛權中將、元慶元年十一月從

四位上。四年五月廿八日卒、年五十六。

その妻は紀有常の女にて、有常の妹は惟喬親王の御母なので、惟喬親王を押しして藤氏に對抗しようとしたのである。然し文徳天皇は親王に確かな御うしろみがないので清和天皇に御譲位になつた

序 一二、二四五 註 二二

詞 一三八、一四三、一五四、一五五、一六八、

歌 二八、三〇、三〇、四四、六二、六九、七四、八六、一〇三、一〇六、一一九、一三八、一三八、一三九、一四一、一四三、一四四、一五四、一五五、一六二、一六八、一八五、一八七、一八八、一九〇、一九一、一九四、一九八、二〇七

ナリヒラノハ、ノミコ 業平の母の親王

伊登内親王。桓武帝第七の皇女。阿保親王との間に行平業平を生んだ。貞観三年九月薨去

歌 一九四

ニ

ニデウ 二條

歌 二一一

ニデウノキサキ 二條后

藤原氏。名は高子。長良の二女。母は總繼女。清和帝の女御となり、陽成帝を生み奉つた。元慶元年正月立后、同六年正月皇太后となつたが其の後、東光寺の僧善祐と好し、寛平八年九月に后位を停められ、朱雀帝の天慶六年に本位を復せられた。延喜十年三月廿四日薨

詞 二〇、七四、一一二、一八八

歌 一九 註 八六

ニナノオホントキノチユウジャウノミヤ スンドコロ 仁和御時中將御息所

詞 三六、三九、四〇

ニナノミカド 仁和帝

光孝天皇の御事、諱は時康、仁明天皇の第三子。元慶八年二月御位に即かれ、仁和三年八月廿八日崩御、御年五十七

歌 二二、八五

詞 六三、八六、九八

註 五四、(二三六)

ニシヤウ 仁明

註 一六六、一六八、一八〇

ノチカゲ 後藤

中納言藤原有種(又有種)の子。延喜十九年正月七日從四位下備前權守

歌 三九 詞 九五

ノボル 登

仁明帝の第十五皇子。母は更衣三國の町承和の始め源姓を賜はつてゐたが母の過失によつて屬籍を削られたので出家して深寂と號した。貞観八年還俗して不遇であつたが諸皇族の奏言によつて貞朝臣を賜はつた。蓋し母の過失ある子は再び源姓に復することができないのであつた。これから任官して寛平五年正月紀伊權守に任ぜられ同六年正月七日正五位下に昇つた

歌 一六六

ノボル 昇

詞 一六〇

三、二〇七、二二六、二二九、二二九

ヘイカ 陸下

序 二四六

ヘイジャウテンワウ 平城天皇

ナラノミカドを見よ

註 三六

序 二四六

ヘンゼウ 暹昭

ヨシムネノムネサダを見よ

序 一一、二四五

詞 三二、五九、六三、七七、八五

歌 二二、四一、五〇、五九、六四、七四、八六、九七、九七、一一〇、一一七一六六、一七七、一八一、二二五、二二六

ホドコス 惠 又は忠

源氏。大納言弘の孫、弱の子。延長六年正月廿六日丹波守。九年卒

歌 一一六

ホフワウ 法皇

ホドコス 法皇

ハ

ハルカゼ 春風

小野氏。寛平二年九月廿日陸奥權守、三年正月卅日讃岐權守、昌泰元年正五位下

歌 一四五、二〇六

ヒ

ヒガシサンデウノヒダリノオホイマウチギミ 東三條左大臣

歌 二五

ヒダリノオホイマウチギミ 左大臣

藤原時平のこと。昌泰二年左大臣。延喜九年四月四日薨、年三十九

歌 六〇、二三〇

ヒデヲカ 秀崇

真岑氏。寛平八年正月七日從五位下、同廿六日伯耆守

歌 九三

ヒトザネ 人貞

酒井氏。延喜十四年正月從五位下、同十二年土佐守。十七年四月卒

歌 一六〇

ヒトマロ 人麿

序 一〇、一六、二四四

註 七三

歌 四五、五七、八二、一〇二、一三九、一四九、一九五、(二一九)

ヒヤウエ 兵衛

藤原氏。高經の女。高經が右兵衛の督であつたので女を兵衛といつたのであらう。尊卑分脈には忠房室とある

歌 一一四、一六九

フ

フカクサノミカド 深草帝

序 一三

詞 一八〇、一八〇

フカヤブ 深養父

清原氏。道雄の曾孫、海雄の孫、房則の子。延喜八年正月内匠允。延長元年六月廿二日内藏大允、八年十一月廿二日從五位下

歌 三四、四三、五〇、七五、八一、九三、一〇九、一一三、一三二、一三三、一三五、一三七、一四七、一五一、一五

ホドコス 惠 又は忠

源氏。大納言弘の孫、弱の子。延長六年正月廿六日丹波守。九年卒

歌 一一六

ホフワウ 法皇

ホドコス 法皇

詞 一九七、一九八、二二三
ホリカハノオホキオホイマウチギミ 堀川
太政大臣

詞 一七六
ホンキソノオホキオホイマウチギミ 本院
太政大臣

註 六〇

マ

マサズミ 當神

源氏。能有の子。延喜三年二月少納言、
七年從五位上

歌 二一

ミ

ミクニノマチ 三國町

紀氏。名虎の女。仁明天皇の更衣、貞朝
臣登の母

歌 四七

ミチザネ 道眞

スガハラノアソムを見よ

ミチノク 陸奥

橋氏。葛直の女

歌 二二二

ミツネ 朝恒

凡河内氏。寛平六年二月廿八日甲斐權少
目、七年正月十三日丹波權大目、十一年
正月十三日和泉權掾、任が満ちて歸洛の
上、兼輔の粟田の山庄にて歌會を催した
(後撰集卷十五)

詞 一九〇

序 一五、二四六

歌 二四、二五、三一、三五、三八、三
九、四二、四三、四四、四四、四九、五
〇、五〇、五〇、五二、五四、五七、五
八、六一、七一、七六、七六、七八、八
一、八三、八八、九四、九四、九九、一〇
五、一〇五、一二〇、一三二、一三三、
一三五、一三六、一三六、一三七、一四
二、一四七、一五一、一六三、一七〇、
一七九、二〇〇、二〇四、二〇九、二一
〇、二二一、二二四、二二五、二二八、
二二三、二二三

ミネフ 岑雄

上野氏。承和の頃の人

歌 一七七

ミヅノヲノミカド

註 一六二、二四一、三三六

ミヨシ 三善

藤原氏

詞 八七

ム

ムネサダ 宗貞

良岑氏。桓武天皇の孫、安世の子。仁明
天皇の御代に藏人頭となつたが嘉祥三年
三月二十一日天皇崩御によつて出家し、
通昭と號した。仁和元年十月廿日僧正、十
二月十八日仁壽殿にて七十賀を贈つた。
寛平二年正月十九日寂、年七十五、花山
の元慶寺の座主(ヘンゼウを合せ見よ)

註 一八一

ムネサダ

紀氏

詞 九三

ムネヲカノムスメ 宗岳娘

歌 二二三

ムネヤナ 棟梁

歌 一一六

ユ

ユキヒラ 行平

在原氏。平城天皇の皇子阿保親王の子、
業平の兄。父親王の奏によつて在原姓を
賜つた。元慶六年正月十日中納言、八年
二月廿三日正三位民部卿、九年二月廿日
按察使、仁和三年四月十三日致仕。寛平
五年卒、年七十六

註 二二、六三、一九四、二二六

ムネユキ 宗子

源氏。寛平六年正月七日從四位下、源姓
を賜つた。承平三年十月右京大夫、天慶
二年正月七日正四位下、同年卒

歌 二三、五三、七九、一三九、一六九
一七一

ムネユキ (或 アツユキ?) 致行

歌 六〇

モトユキ 茂行

紀氏。承和の頃の人

歌 一二四、一八二

モトカタ 元方

在原氏。棟梁の子。大納言國經の猶子と
なつた

歌 一九、三八、四三、五五、五六、六
七、八三、一一九、一二〇、一四〇、一
四〇、一六三、二二二

モトノリ 元規

ヤマモチ

ヤカモチ 家持

歌 五九

ヤスヒデ 康秀

文屋氏。字は文琳、貞觀二年三月廿日刑
部中判事、後三河掾、元慶元年正月十五
日山城大掾、三年從殿助

序 一二、二四五

歌 二〇、六五、一一二、一八〇

詞 二〇二

ヤマモチ

ヨシアリ 能有

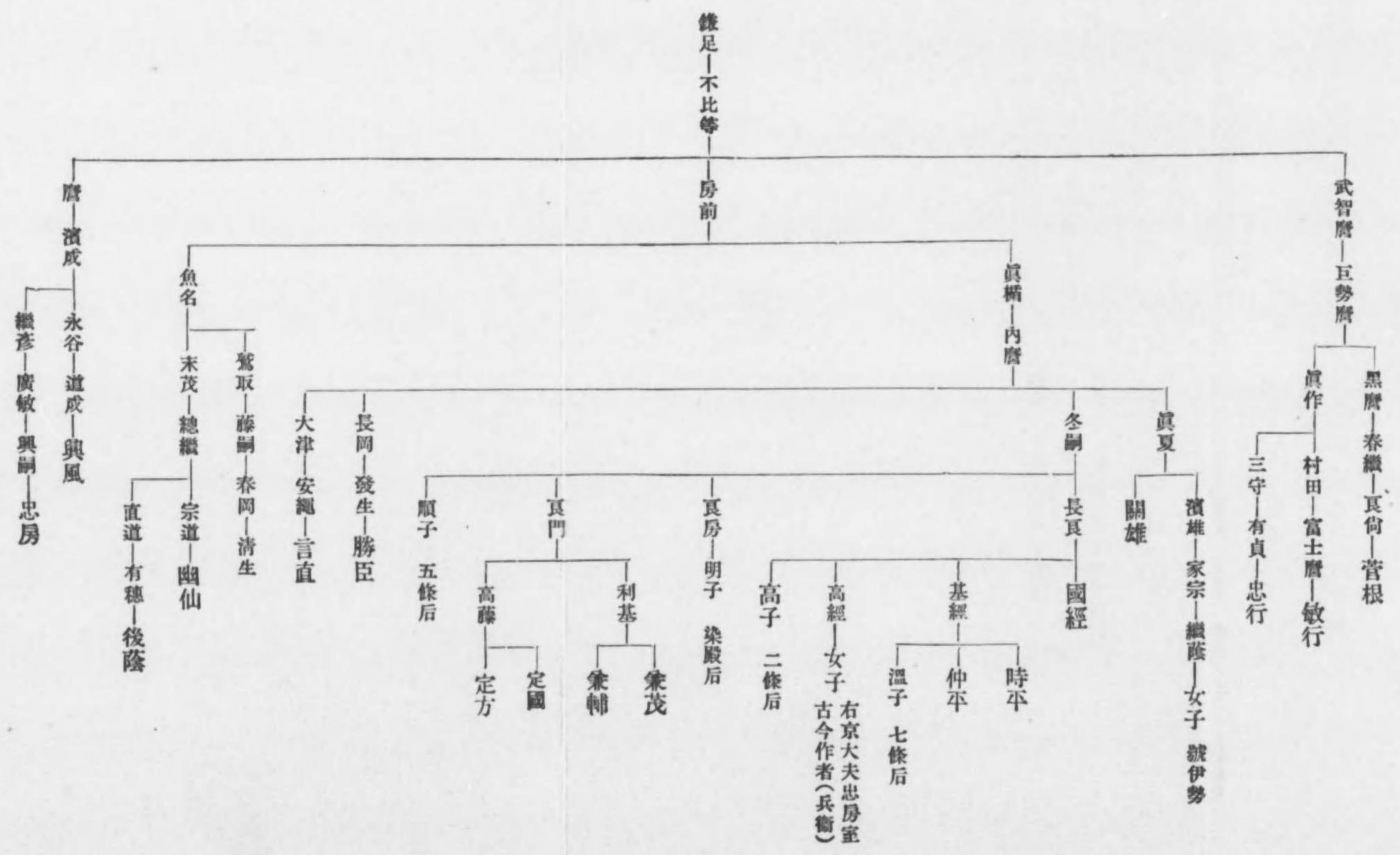
註 一五九、一八一

ヨシカ 良香

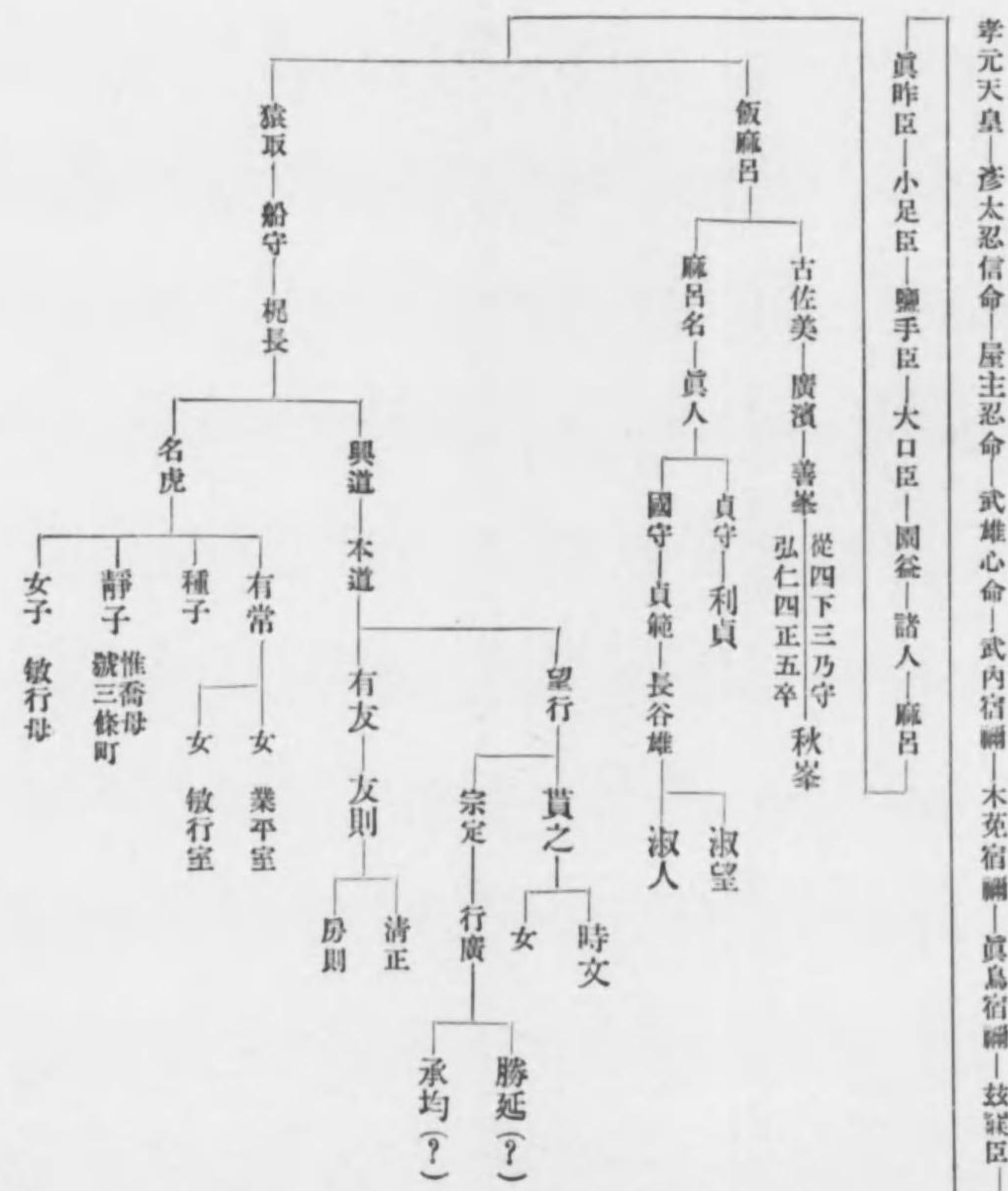
都氏。貞繼の子、初めの名は言道。貞觀
十四年四月渤海の使を接待するに當つて
奏して良香と改めた。十五年正月七日從
五位下、十八年四月一日侍從。元慶三年
二月廿五日卒、年三十六、朗詠の「氣晴
風梳新柳髮」の作者

二六三

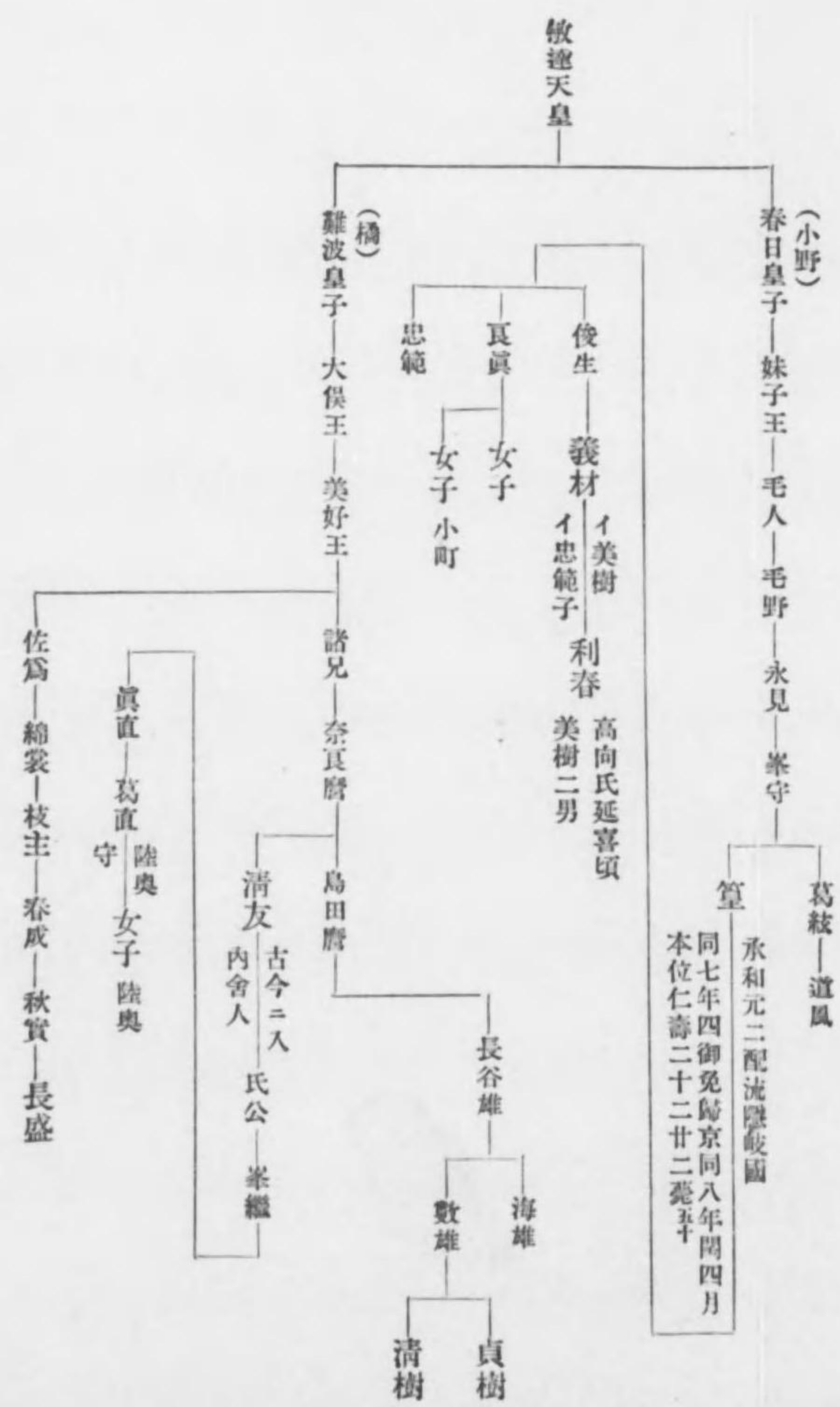
[二 圖 系]



[三 圖 系]



[四 圖 系]



昭和三年一月五日印刷
昭和三年一月十日發行

古今和歌集

定價金貳圓



編者	藤村作
發行者	東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地 佐藤正叟
印刷者	東京市京橋區弓町二十五番地 高橋郁

(刷印社會式株刷印第三)

發行所

東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地
振替口座東京二九五〇七番

至

文

堂

電話青山 三四四三番
三四四六番

高等學校國文教科書

芭蕉七部集	大鏡	徒然草	平家物語	源氏物語	萬葉集	古事記	枕草子	新古今和歌集	古今和歌集	抄胸算用	抄日本永代藏
近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	最新刊	最新刊	最新刊		
							定價金貳圓	定價金貳圓	定價金貳圓	定價金七拾錢	定價金八拾錢

●●東京帝國大學教授 文學博士 藤村作先生編●●

發行所 至文堂

東京市東區馬場三丁目四番地
 電話 二九〇七
 青島市東區中山路
 電話 三〇七

322
494

終